法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

「フィルターバブルを体感する」授業実践 ：ロシア・ウクライナ戦争をテーマに

長澤，江美

(出版者 / Publisher)
法政大学図書館司書課程
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究
(巻 / Volume)
4
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
113
(終了ページ / End Page)
126
(発行年 / Year)
2023-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030049

法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第4巻1号、113-126
特集：メディア情報リテラシー新時代

「フィルターバブルを体感する」授業実践
―ロシア・ウクライナ戦争をテーマに

長澤江美
スマートニュース メディア研究所

概要

スマートニュース メディア研究所では、これまでに発信者の立場に立って情報発信を行う「情報を発信してみよう！」など、体験型のメディアリテラシーの授業実践を行ってきた。本稿で紹介するのは、人為的にニュースのフィルターバブル「空間」を創出して、学生や生徒の意見の変化を観察しつつ、学生（生徒）自身にも自分の意見の変化に気づいてもらうという「実験型」の授業である。具体的には、2022 年 2 月から始まったロシア・ウクライナ戦争についての情報を題材とし、学生（生徒）が「ロシア寄り」「ウクライナ寄り」に偏った情報群を見せ、どちらに正義があるのかなどの「戦争観」の変化を聞き、学生（生徒）の気づきについて探った。特に、「ロシア寄り」の情報群を見た学生（生徒）に大きな変化があらわれ、自身の考えの変化に気づいた学生（生徒）たちが、ニュースへの接し方を考え直したり、「フィルターバブル」に陥ることの問題点を自覚するという結果となった。2022 年 4 月～ 7 月までに、2 つの大学、2 つの高校で実施した授業におけるデータを紹介しつつ、得られた知見について報告する。

キーワード：
フィルターバブル、時事問題、メディアリテラシー

1．フィルターバブルを扱ったメディアリテラシー授業の目的

インターネット上には、膨大な量の情報が溢れている。2020 年の世界データ総量は 59 ゼタバイトを超えた[(1)]。1 ゼタバイトが、世界中に存在する砂浜の砂の数と言われており、情報量の多さが途方もないものであることがわかる。

それを、整理して、必要なものだけを見せてくれる便利なテクノロジーのおかげで、私たちは混乱せずにインターネットに接することができている。一方で、その弊害とされているのが「フィルターバブル」という問題である。

これはイーライ・パリサー氏が 2011 年の著書『The Filter Bubble』（邦訳『閉じこもるインタ

ーネット―グーグル・パーソナライズ・民主主義』早川書房）の中で提唱したもので、検索サイトやニュースサイト、アプリが提供するアルゴリズムによって、ユーザーが、自分の見たいものしか見えなくなってしまう、という現象だ。見えなくなった結果、視野が狭まり、考え方が極端になっていく弊害が指摘されている。

この現象の存在を知らない人もいれば、知識として、その単語や意味を知っている、という人も多くいるだろう。このバブルの怖いところは、自分自身気づかないうちに、その内側にはまっている、ということだ。存在を知らない人も、知っている人も、誰もが無意識のうちに「フィルバーバブル」の中にはまっている可能性はある。

もう一つ、多くの人は、さまざまなニュースに日常的に触れているだけに、逆に、情報が持つ力についても、普段は意識することが難しい。偏った情報に触れて、陰謀論を信じ込んでしまう人の話を聞いても、自分だけは大丈夫、と思いがちだ。だが、人間は、知らず知らずのうちに、人から聞いた噂話、テレビから聞こえてくるコメンテーターの話、スマホに表示されるネット記事の見出しなど、普段触れている情報から、何かしらの影響を受けている。

その両方を体感できる授業を行いたい、というのがこの授業作りを始めたきっかけだ。

フィルターバブルを体感するためには、実際に起きている大きな時事問題をテーマにすることが適している、と考えた。理由は 2 つある。1 つは、学生（生徒）が自然な形で関心を持てるとともに、現実を踏まえて物事を捉えることができること。虚構のテーマ・情報を用いて授業をした場合、それで仮に「フィルターバブル」を体感できたとしても、「この授業用に作られたものだから」「現実にはあり得ないだろう」と考え、「自分事」として捉えない可能性がある。

2 つ目は、実際に言論空間に流れているさまざまな情報―新聞記事から、ツイート、ブログまで―を教材として使うことができるという利便性もある。これは、教育現場の先生たちにとっても、一から題材を集めるという手間が省けることになる。

情報の偏りやそうした情報に接したときの考え方の変化を体感するためには、二項対立として問題設定するのが適している。今回の授業のテーマは、2022 年 2 月 24 日にロシアによるウクライナへの全面侵攻が始まった「ロシア・ウクライナ戦争」とした。

2. 授業の内容

（1）授業の流れ

授業の大きな流れは、表 1 にあるとおり、学生（生徒）たちが、偏った情報群を読む前と後で、テーマについての自身の意見について、同じ設問でアンケートを取り、その変化を見る、というものだ。

今回の場合は、アンケートは、「ロシア・ウクライナ戦争について、どう感じているか」をテ

ーマとした。また、「ロシア寄りの言い分に偏った情報群（以下、ロシア寄り）」「ウクライナ寄りの言い分に偏った情報群（以下、ウクライナ寄り）」をそれぞれ準備した。

クラスを教師側で 2 つのグループに分けておき（学生（生徒）には、2 つのグループに分けていることは、事前には知らせない）、「ロシア寄り」「ウクライナ寄り」情報群が印字された情報セットを渡す。学生（生徒）は、全員が同じ情報を手渡されている、と感じているはずである。

情報セットの 1 枚目には、情報群を読む前に行うアンケートフォーム（Google Forms を利用）の QR コードを印字した。それを、タブレットもしくはスマホで読み取って、その場で回答させる。

設問内容（図 -1）：

①ロシアとウクライナ、どちらに正義があると思いますか（選択肢は 5 段階、1:ロシアに～ 5:ウクライナに）

②ウクライナは降伏すべきだと思いますか（選択肢は 5 段階、1：すべき～ 5：すべきでない）

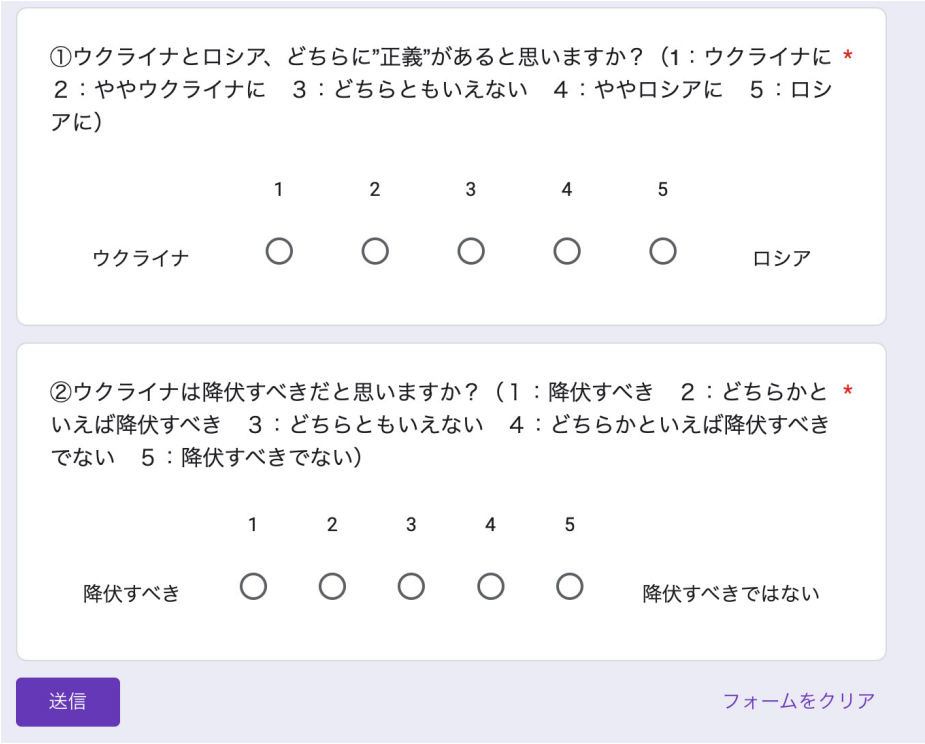

図1　アンケート画面

次のページには、この戦争自体について知識の少ない学生（生徒）のために、報道機関が作成した「45 秒でわかる、ロシア・ウクライナ戦争」という動画リンクに飛べる QR コードを挿入した。

この動画は中立的に作られており、どちらに正義があるかについて、バイアスがかからないと判断した。その後の記事などの情報を読んでいく上で、一定の知識は必要だと考え、このようなプロセスを入れることにした。

その後、学生（生徒）は、情報群を読み進めていく。最後のページには、またアンケートフォームへの QR コードが入っている。

このアンケートへの記入をする前に、近くに座っている学生（生徒）同士（同じ情報群を読んでいるグループ内の必要がある）で、読んだばかりの情報群について感想・意見を話し合う時間を取った。これは、同じ意見を持つ者同士が話し合うことで、さらに意見が強化される、「エコーチェンバー」といわれる現象の疑似状況を作り出すことを狙った。

表1　授業の流れ

時間	教師の活動	学生（生徒）の活動
5 分	2 グループそれぞれに情報セットを配布、説明	
20 分		アンケート①記入、ロシア・ウクライナ戦争についての映像視聴（45 秒）、セット内の情報を黙読
5 分		近くの人とディスカッション
3 分		アンケート②記入
15 分	授業の本来のねらいを説明、アンケート結果を画面共有して、変化について見ていく（プロジェクタ利用）	
10 分	もう一方のセットを配布	最初に配られたセットとの違いを見る
15 分	フィルターバブル、エコーチェンバーについて解説	
10 分		感想を伝える
2 分	まとめ	

（2）それぞれの情報群

学生（生徒）に見せる情報群の内容が、授業の肝となる。

情報は、表示される順番に読んでいく、と前提して、ロシア寄りはロシアに、ウクライナ寄りはウクライナに対して、感情が寄り添っていくようなストーリーを立てて、情報を並べた。

（A 大学では、すべて印字して、読ませたい順番に並べ、クリップ留めした。B 大学、C 高校、D 高校では、情報群を順番に読み込んだ PDF を QR コードで読み込ませて、タブレットやスマホに表示させた）

まず、どちらのグループにも共通して、戦況を短めに伝える中立的なニュース記事を入れた。全てがどちらか寄りのものばかりだと怪しまれてしまうためである。また、両方に共通して入れた情報が数本ある。周りにある情報によって、読み方が変わるような内容のものを選んだ。後から、両方の情報群を見比べた時に、その違いも感じてほしいという狙いがある。

選択した情報は、国内外の報道機関が出した記事、テレビでの発言を扱ったネット記事、有名人によるツイート、個人のコラム、真偽が不明なネット記事など多岐にわたる。真偽にこだわらなかったのは、実際のネットの情報空間においても、真偽不明の情報やニュースが大量に流れているためである。要は、学生（生徒）が一定の方向に（ロシア寄りならロシア、ウクライナ寄りならウクライナに）説得されるようなニュース・情報を並べるというのがポイントである。

情報群は、2 種類作成した（A 大学、C 高校で実施した際のグループと、B 大学、D 高校で実施した際のグループ）。理由は実施時期の違いで、戦況が刻々と変化していたためである。A 大学、C 高校は 2022 年 6 月上旬に実施、B 大学は 6 月下旬、D 高校は 7 月初旬に実施した。特に戦況を伝える記事などを中心に入れ替えた。

（2）-1.　ウクライナ寄りの情報群

ウクライナに対して、同情的に感情が動くように、情報を並べた。「ウクライナ国民の置かれている状況・必死に戦う姿」「ロシアの戦争犯罪の非道さ」「国際社会もロシアに対して非難している」ことが、報道や個人ツイートなど、角度を変えて、さまざまな方向から伝わるようにしている。最後には、学生（生徒）にとって少しでも身近に感じるように、ウクライナからの避難民が日本で頑張って生活している様子を伝える記事を入れた。

2 回目セットでは、ロシアの爆撃機が日本上空に、という記事を入れた（ウクライナ寄り・ロシア寄り両方）。これは、ウクライナ寄りでは、「このままでは、日本にも戦いが及ぶのではないか」と思わせ、さらにウクライナに感情移入をするのでは、という狙いから入れている。

＊グレーの網掛けは、ロシア寄り、ウクライナ寄りで共通しているもの

（A 大学・C 高校で実施した際の内容）

1. 戦況を伝える中立的な記事（事実のみ）
2. 戦うウクライナ軍の様子を伝える記事
3. ウクライナが戦うのは合法的だとする国際政治学者のツイート
4. 国連が、ロシアの原発攻撃を非難した、という記事
5. ロシアの非道さを伝える記事
6. 日本のコメンテーターによる「犠牲者を減らすために、ウクライナは降伏すべき」という発言を取り上げた記事
7. ウクライナの惨状を伝える、報道機関のツイート
8. 「ロシアを悪」と決めつけてしまうことは簡単では、という問題提起をした、映画監督の発言を扱った記事
9. ウクライナの惨状を現場から伝える、個人ジャーナリストのツイート
10. ロシア・ウクライナ戦争の情報戦についての様子を伝える記事

11. ウクライナ国民たちが戦っている様子を伝える記事
12. 日本へ避難しているウクライナ国民の様子を伝える記事

(B 大学・D 高校で実施した際の内容)

1. 戦況を伝える中立的な記事（事実のみ）
2. ウクライナで犠牲者が増え続けていることを伝える記事
3. ウクライナが戦いを続けることの国としての正当性を伝えるツイート
4. ロシアの行っている戦争犯罪について人権団体が訴えていることを伝える記事
5. 「ロシアを悪」と決めつけてしまうことは簡単では、という問題提起をした、映画監督の発言を扱った記事
6. ロシアによって、世界的食糧難が引き起こされる可能性を伝える記事
7. 日本のコメンテーターによる「犠牲者を減らすために、ウクライナは降伏すべき」という発言を取り上げた記事
8. ウクライナ市民たちが戦っている様子を伝える記事
9. 日本へ避難したウクライナ国民の声を伝える記事
10. ロシアの爆撃機が日本上空でみられた、という記事

(2) -2.　ロシア寄りの情報群について

一般的に日本ではウクライナに寄った報道が多い。ロシアによる侵略は、明確な国際法違反なので、それは自然なことであるが、多くの学生（生徒）も最初は「ウクライナ寄り」の感情を持っていると予想して、ロシアに対してのイメージが揺らぐような情報を選択するよう心がけた。全体を通して、「ロシアにもまともな理屈がある」「ウクライナにも悪いところがある」「そもそもこの戦争は、本当にロシアが悪い、と簡単に言い切っていいのだろうか」という考えになりそうな情報を並べた。また、ロシアの攻撃について非難めいて書かれた記事の後に、「日本の報道が偏っている」と指摘するツイートを挿入し、そのツイートに信憑性を持たせるような並びとした。その後に、「『ロシアを悪』と決めつけてしまうことは簡単では、という問題提起をした、映画監督の発言を扱った記事」を入れた。

(A 大学・C 高校で実施した際の内容)

1. 戦況を伝える中立的な記事（事実のみ）
2. 日本の報道がウクライナ寄りに偏っている、と指摘するツイート
3. 「ロシアを悪」と決めつけてしまうことは簡単では、という問題提起をした、映画監督の発言を扱った記事
4. ロシアのウクライナ市民に対する残虐な行いについての記事
5. 日本のコメンテーターによる「犠牲者を減らすために、ウクライナは降伏すべき」という発言を取り上げた記事

6. フランスの研究家による「ロシア・ウクライナ戦争は、アメリカに責任がある」という発言を扱った記事
7. ウクライナの中でも、親ロシア地域の住民は喜んでいる様子を報じた記事
8. 日本の政治家が「ウクライナにも責任があるのでは」と述べたことを伝える記事
9. 日本の政治家による、ウクライナ大統領も悪い、と述べたツイート
10. ウクライナがネオナチだ、という話を取り上げた記事
11. ウクライナ国民が武器を持って戦う様子を報じた記事
12. ウクライナ国民が、ロシア兵を毒殺した、という記事

(B 大学・D 高校で実施した際の内容)

1. 戦況を伝える中立的な記事（事実のみ）
2. ロシアのウクライナへの攻撃について伝える記事
3. 日本の報道がウクライナ寄りに偏っている、と指摘するツイート
4. 日本の政治家が「ウクライナにも責任があるのでは」と述べたことを伝える記事
5. 「ロシアを悪」と決めつけてしまうことは簡単では、という問題提起をした、映画監督の発言を扱った記事
6. フランスの研究家による「ロシア・ウクライナ戦争は、アメリカに責任がある」という発言を扱った記事
7. 日本のコメンテーターによる「犠牲者を減らすために、ウクライナは降伏すべき」という発言を取り上げた記事
8. ウクライナで犠牲者が増え続けている、という記事
9. ロシアの爆撃機が日本上空でみられた、という記事
10. ウクライナ国民が、ロシア兵を毒殺した、という記事

（3）アンケートの結果

学生（生徒）たちは、2 回目のアンケートを送信した時点では、この授業の仕掛けには気づいていない。4 回実施したが、どのクラスでも、その仕掛けに気付かれたことはなかった。

アンケートの記入が終わったことをフォーム上で確認したら、この授業の本当の目的について知らせる。クラスによっては、「ええー」という驚きの声が漏れていた。

授業の立て付けを説明してから、プロジェクターで、ロシア寄り情報群を与えられた A グループ、ウクライナ寄り情報群を与えられた B グループ、それぞれの読前アンケートの結果グラフを表示する。4 つの学校に共通していたのは、読前アンケートだと、正義はウクライナにある・ウクライナは降伏すべきでない、という回答が多いことだ。これは、学生（生徒）自身もその後の感想で話をしていたが、日本における報道がウクライナに同情的な視点やトーンのものが多いからであろう。

どの学校においても、数字の幅に違いはあるが、ウクライナ寄りグループだと、ウクライナに同情的な意見が強まる傾向にあった（D 高校以外）。また、全ての学校において、ロシア寄りグループはウクライナに傾いていた意見が大幅に減り、「どちらとも言えない」が増える、という結果が出た。それを見た学生（生徒）たちからは、どよめきが漏れていた。感想にも多く書かれていたが、「自分自身も含めて、ここまで意見が変わるとは、思っていなかった」という驚きからだろう。

4 つの学校での回答をまとめたものの結果は下記の通りである。

（3）-1.　情報群を読む前の状態

情報群を読む前のアンケート結果は、ウクライナ寄り情報群を渡されたグループとロシア寄り情報群を渡されたグループでは、大きな差はなかった。

どちらのグループも、①どちらに正義があると思いますか、という設問に対しては、「ややウクライナに」という回答が最も多く、次に「どちらとも言えない」、「ウクライナに」と続き、「ややロシアに」「ロシアに」は非常に少ない。

下記にある図 2 では、回答人数を折れ線グラフで表しているが、ウクライナ寄り情報グループと、ロシア寄り情報グループが似たような線を描いているのが分かる。

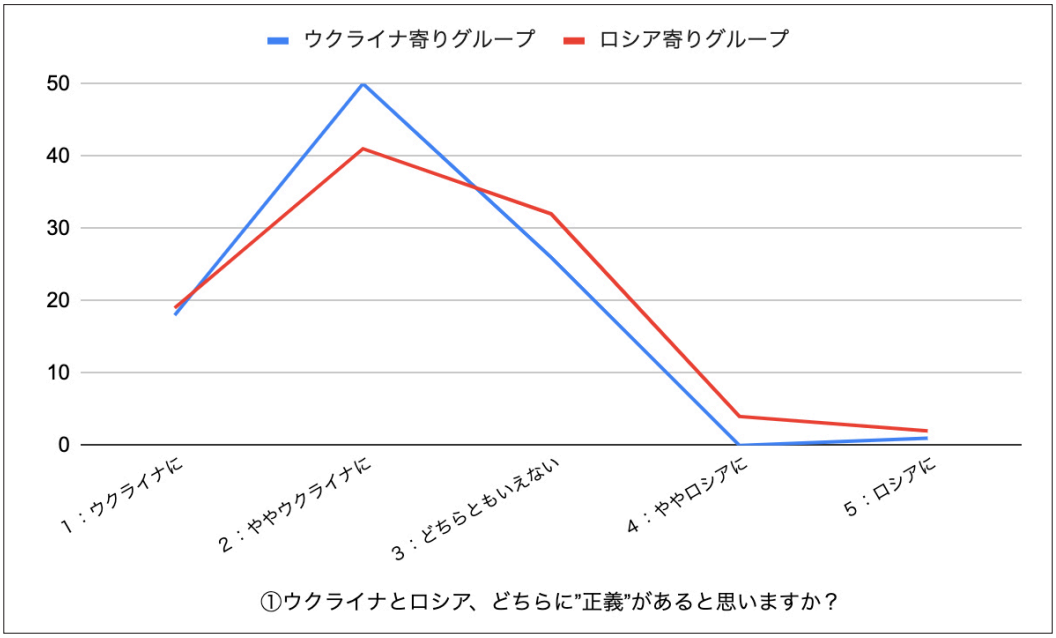

図2　読前アンケート結果（設問①について、ウクライナ寄り情報群を渡されたグループとロシア寄り情報群が渡されたグループの回答状況）

設問②についての読前アンケートでは、ウクライナ寄り情報群を渡されたグループの方が、元々は「どちらかといえば降伏すべき」を一番多く選択していた。一方で、ロシア寄り情報群を渡されたグループでは「どちらとも言えない」が一番多かった。他選択肢については、ほぼ似たような分布をしている（図 3）。

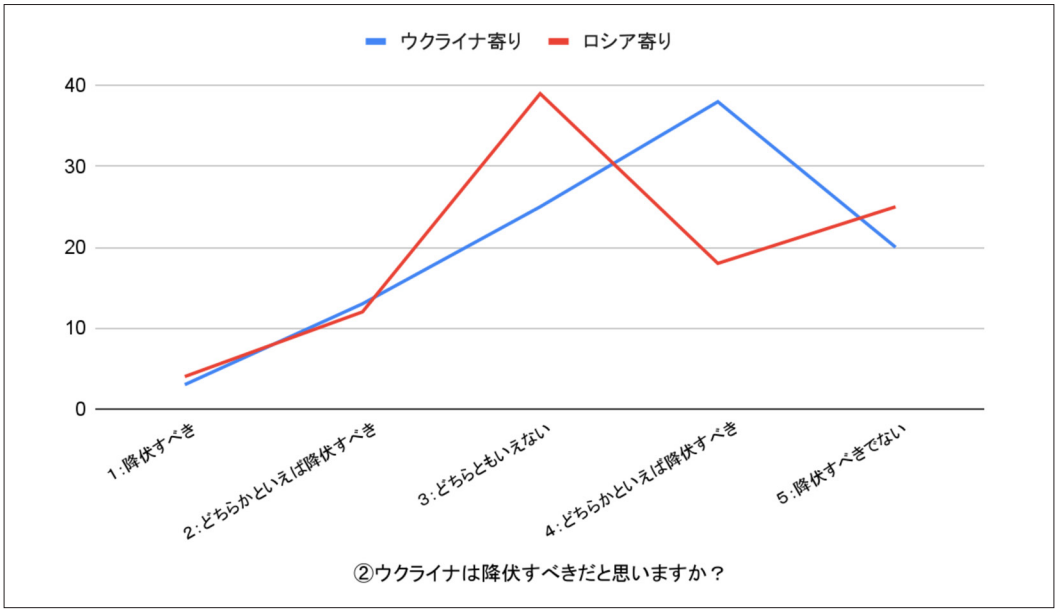

図3　読前アンケート結果（設問①について、ウクライナ寄り情報群を渡されたグループとロシア寄り情報群が渡されたグループの回答状況）

（3）-2.　情報群を読んだ後の変化

情報群を読む前と後での、学生（生徒）の意見の変化を見るために、各設問の選択肢を点数化した際の平均値を比較した。

設問①「ウクライナとロシア、どちらに ” 正義 ” があると思いますか」については、「ウクライナに」＝ 1 点、「ややウクライナに」＝ 2 点、「どちらとも言えない」＝ 3 点、「ややロシアに」＝ 4 点、「ロシアに」＝ 5 点とした。

ウクライナ寄り情報群を読んだグループでは、読前の平均点が 2.12 で、読後では 1.94 へと減少。ロシア寄り情報群を読んだグループは、読前平均点は 2.28 だったのが、読後 2.66 へと増えている（図 4）。

読前は、双方のグループとも近い点数からスタートしていたが、ウクライナ寄りグループはウクライナへ、ロシア寄り情報群を読んだグループは、ロシア寄りに意見が動いていた。数値を見ると、ロシア寄りの方が変化幅が大きくなっている。

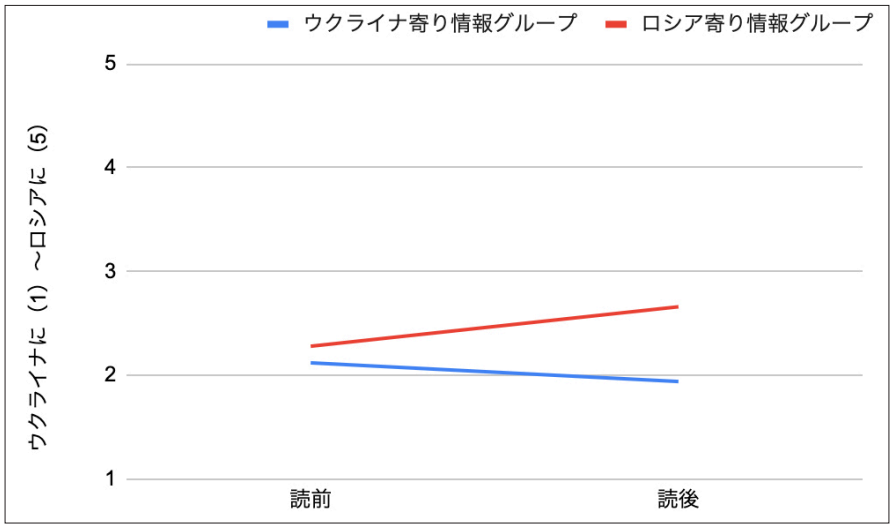

図4　設問①「ウクライナとロシア、どちらに”正義”があると思いますか」について、情報群の読前・読後での意見の変化（ロシア寄りの意見に変化するほど、点数が多くなる）

設問②「ウクライナは降伏すべきだと思いますか」については、「降伏すべき」＝ 5 点、「どちらかといえば降伏すべき」＝ 4 点、「どちらとも言えない」＝ 3 点、「どちらかといえば降伏すべきでない」＝ 2 点、「降伏すべきでない」＝ 1 点とした。設問①と同様で、点数が高い方が、ロシア寄りの意見となる。

ウクライナ寄り情報群を読んだグループは、読前の平均が 2.4 だが、読後は 2.46 とほぼ横ばいだ。一方で、ロシア寄り情報群を読んだグループは、読前平均は 2.51 だったのが、読後は 2.83 と緩やかだが点数が上がり、ロシア寄りに意見が変わっている（図 5）。

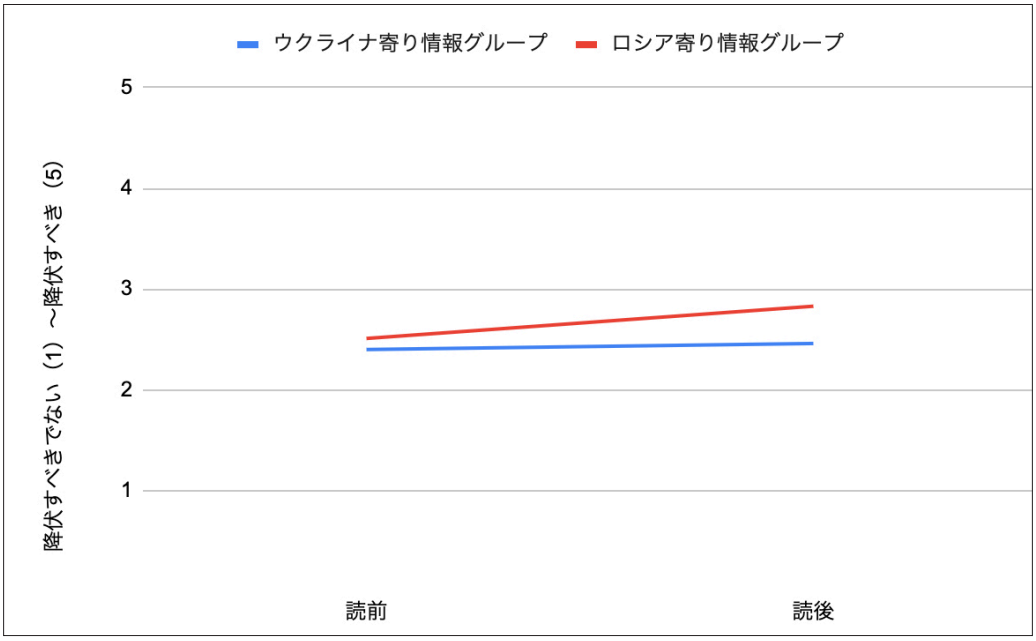

図5　設問②「ウクライナは降伏すべきだと思いますか」について、情報群の読前・読後での、意見の変化（ロシア寄りの意見に変化するほど、点数が多くなる）

(3) -3.　意見の変化の内訳

情報群を読む前から、読んだ後に、どのように意見が変わったのか。前項では平均点化して、全体での変化を見たが、ここではその内訳を見ていく。

設問①については、ウクライナ寄り情報群を読んだグループは、読前では「ややウクライナに」を選択していた学生（生徒）が突出していたのが、読後には減り、その分、「ウクライナに」「どちらとも言えない」が増えている（図 6）。

ロシア寄り情報群を読んだグループでは、読前と比べて、読後では「ウクライナに」「ややウクライナに」が減り、「どちらとも言えない」が倍増している（図 7）。

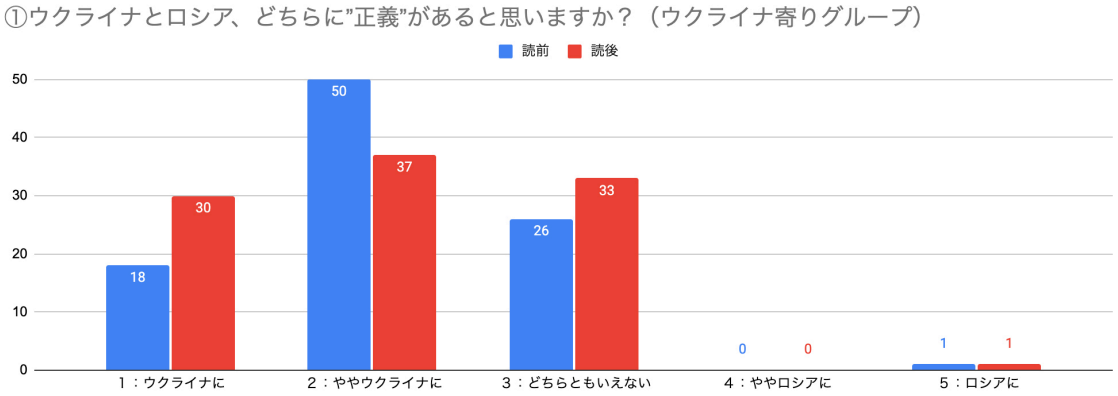

図6　ウクライナ寄り情報群を読んだ学生（生徒）の、読前・読後アンケートの結果（設問①）

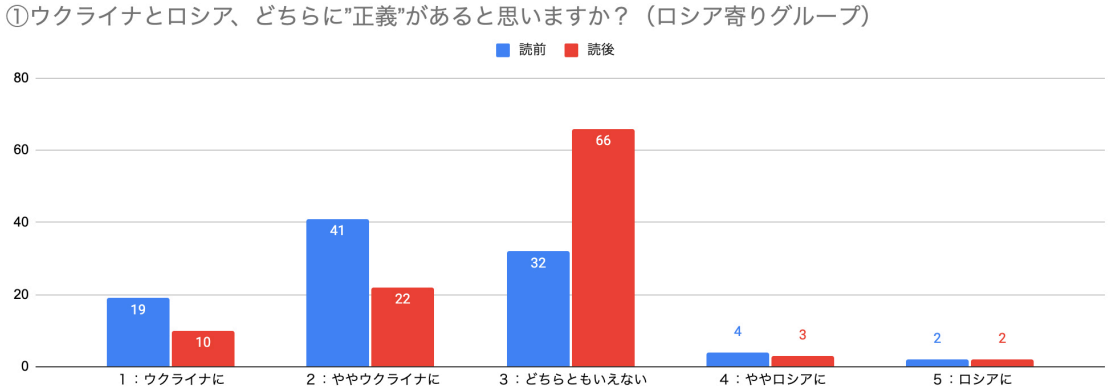

図7　ロシア寄り情報群を読んだ学生（生徒）の、読前・読後アンケートの結果（設問①）

設問②については、ウクライナ寄り情報群を読んだグループは、読後では、「どちらかといえば降伏すべきでない」が減っている。その分、「降伏すべきでない」が増え、「降伏すべき」も微増している（図 8）。

ロシア寄り情報群を読んだグループでは、「降伏すべきでない」が減り、「どちらかといえば降伏すべき」「降伏すべき」が増えている（図 9）。

ウクライナ寄りグループの読後意見で「どちらかといえば降伏すべきでない」が減り、「降伏すべき」と「降伏すべきでない」という真逆の意見がそれぞれ増えた理由としては、情報群の中に、「（ウクライナ国民の犠牲を増やさないために）降伏すべき」とした記事と、「（ウクライナ国民が）戦いを行うことの正当性」についてのツイートが混在していたためではないだろうか。

ロシア寄りグループが、ロシア寄りの意見である「どちらかといえば降伏すべき」「降伏すべき」に変化した理由は、情報群の「（ウクライナ国民の犠牲を増やさないために）降伏するべき」という記事と、一緒に入れた「犠牲者が増え続けている」「残虐な行為をロシアが行っている」という記事が相乗効果を発揮した結果、といえるのかもしれない。

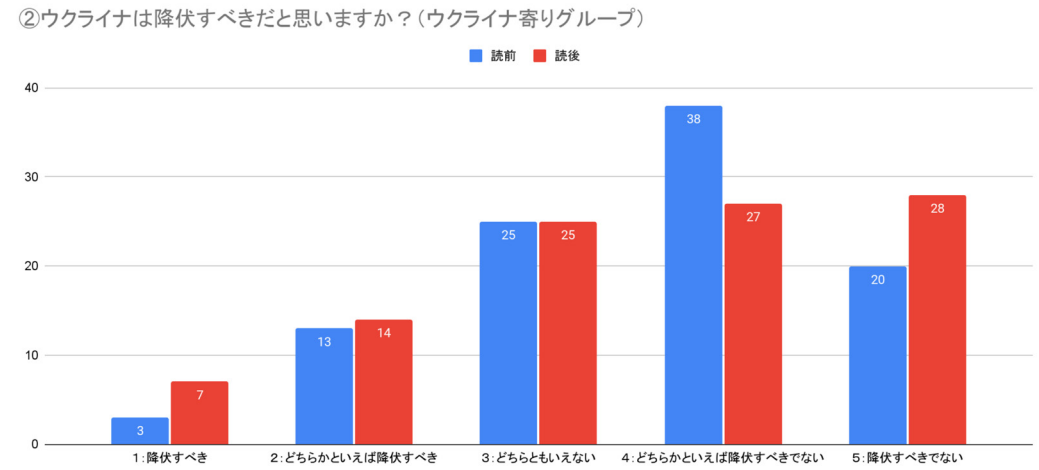

図8　ウクライナ寄り情報群を読んだ学生（生徒）の、読前・読後アンケートの結果（設問②）

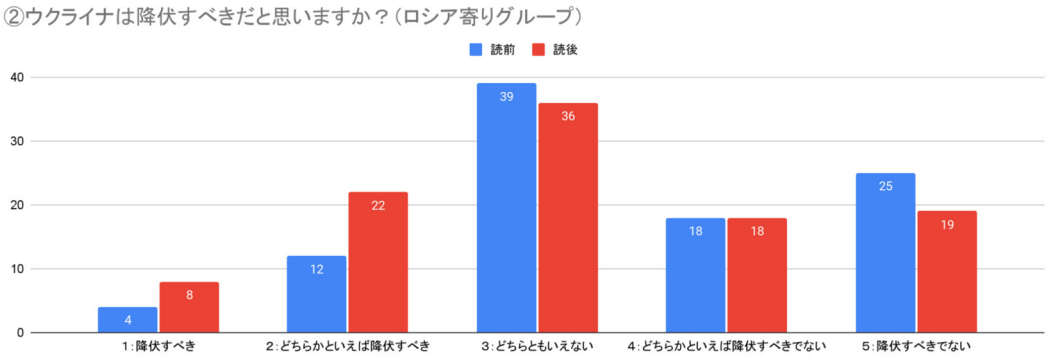

図9　ロシア寄り情報群を読んだ学生（生徒）の、読前・読後アンケートの結果（設問②）

（4）授業のまとめ

アンケート結果を見せた後、今回の授業の目的について解説をする。偏った情報群を見せることで、人為的に「フィルターバブル」を作り、それを体験してもらったのだ、と目的について説

明した。そこから、フィルターバブルとは、エコーチェンバーとは何か、の解説を行った。実際に体感した後だからなのか、どのクラスでも、学生（生徒）たちは熱心に聞き入っていた。

主な感想は、以下に記すが、目立ったのは、フィルターバブルについて知識では知っていても、実際に自分の考えが、短時間のうちに動いた、ということを経験する中での驚きや学びが多いという点である。知識ではなく「体験」からの学びがいかに大きいかということを、教える側としても実感した。

また、ロシア国内でプーチン大統領の支持率が非常に高い理由の一つに、ロシア国営放送の情報がロシアを正当化するニュースに偏っており、ロシアを批判するようなソーシャルメディアへのアクセスが制限されていることで、多くの国民が「フィルターバブル」に陥っている面があると説明すると、生徒たちは納得している様子だった。

このテーマでの授業を実施する上での注意点として、ロシア・ウクライナ戦争について、何が論点なのか、国際法などの観点から、話を最後にもう一度伝えておく必要があると考える。そうでない場合､「ロシアにも言い分があることがわかった」という解釈で終わってしまう学生（生徒）がいるためだ。ロシア側に言い分があったとしても、今回の軍事侵攻は国際法違反であるという見解が一般的であることや、戦争犯罪の恐ろしさなどは、伝えていく必要があると思われる。

（5）授業後の学生（生徒）の感想紹介と、実践者としての所感

授業後には、時間がある場合は、感じたことをクラス全体に共有してもらった。また、授業後にアンケートを書いてもらったクラスもある。

下記に、いくつかの感想を紹介する。

「フィルターバブルを実感して、すごいな、と思った。やはり、頭では理解していても、いざ実感すると、情報の中で溺れていたんだと思った」（B 大学）

「フィルターバブル、というのは言葉しか知らなかった。思い返してみれば、自分が見ているアプリなどには、似たような情報ばかりが表示されることに気づいた。知らないうちにフィルターバブルに入っていたのだと思った」（D 高校）

「情報によって、意見が変わることを体感した。これまで『ロシアで、国が言っていることを真に受けるなんてありえない』と思っていたけれど、毎日聞いていたら、そうなるだろうな、と感じた。プロパガンダの怖さについて、身近に感じることができた」（A 大学）

「多角的に物事をとらえるために、意識的に自分と異なる主張の人と話したり、様々なメディアから情報を得ることの必要性を強く感じる授業でした」（B 大学）

「フィルターバブルについて、これまで他人事だと思っていました。体験してみて、自分も意見が変わっていて、びっくりしました」（D 高校）

今回行った 4 つの授業では、数の差こそあれ、学生（生徒）の意見が 1 回目と 2 回目で変化が見られた。それを数値データとして目の当たりにした学生（生徒）は、少なからず衝撃を感じていた。

GIGA スクール構想で、小学校から一人一台情報端末を持つ時代。フィルターバブルやエコーチェンバー、アルゴリズムリテラシーなどのネットにまつわる課題については、本来であれば小学生の頃から学ぶべきだと考える。

ウクライナ寄り情報群を最初に読み、後でロシア寄り情報群に目を通した A 大学のある学生から、「ウクライナのニュースについては、これまでにニュースで読んでいたことがあるので、自分の意見は変わらなかった。しかし、ロシア寄りのものを読んでみると、衝撃的な新情報が多く、これは意見が変わってしまう、と感じた」という意見が出た。これまで疑ってこなかった事柄に対して、「衝撃的な新情報」と出会い、しかも（実験で行ったように）次々と提示された場合は、人の意見は揺さぶられやすいことを示しているようにもみえる。

これは、デジタル時代に、「陰謀論」が広まりやすくなっている現象にもつながる。衝撃的な「陰謀論」を一度読むと、もともとの見方が大きく揺さぶられる。その後、検索サイトや SNS のアルゴリズムによって、次々と似たような情報が出てきてしまうと、そこにすっかりはまってしまう、という流れである。

学生（生徒）たちの意見の変化や、授業に対しての彼らの感想は、とても素直なものだった。実践者が情報群選びの時に考えたストーリー通りに、意見が変わったり、考えるようになっている学生（生徒）もいた。受講者が素直であると、授業者としてはやりやすい。だが、それでいいのだろうか、という疑問が残った。素直であることは新しいことを学び、吸収する上では重要だ。だが、それだけでは、情報に毎回流されていってしまうことになる。目新しい情報に出会った時こそ、クリティカルに考える力が重要となるのではないか。クリティカルシンキングを育む教育の重要性を改めて感じる実践となった。

（1）The IDC report, Worldwide Global DataSphere Forecast, 2020–2024: The COVID-19 Data Bump and the Future of Data Growth（Doc #US44797920）,